

初等部6年 社会科

「平和について考える」

大隈 賢

争いはなぜ起きるのか。日本の歴史上の戦、戦争、反乱などの争いから、その原因を探ることにした。太平洋戦争の時代を経験された方のお話、映像、資料館での見学を実施する中で、次第に子どもの日々の考え方や行動が大人びてきた。戦争について学ぶ中で、身近な争いについても思いを巡らせ、「平和についてどう考えたか」「大切なものが何なのか」「私たちはどのように行動していったら良いのか」ということを考え、発表した。

I. はじめに

「難しいテーマですね」と多くの方に言われた。

日ごろから私たちが戦争について考えずに済んでいるのだとしたら、それは平和でありがたいことだ。戦争や平和について心配しなくても済む世の中が一番良。

しかし、考えていなければ、どうしても戦争が起きてしまうことを歴史は物語っている。

だからこそ、戦後70年の節目の年には、やはりこのような発表をする意義があると考えた。

II. 報告会までの学習・準備

1 学期の取り組み

- ・ケンカ・争いは、なぜ起きるか? (生活からの考察)
- ・映画『はたらの墓』鑑賞
- ・『はだしのゲン』学級図書に導入
- ・『えほん 日本国憲法』(野村まり子著) を読み、戦時中・戦後の様子の違い、憲法の概要を知る
- ・夏休みのおさらい 戦争に関する本・映画・テレビ番組・資料館の見学などを通して戦争について調べる

2 学期

9月7日～『はだしのゲン 私の遺書』

(中沢啓治著)読み聞かせ

9月16日(水) 菊池先生のお話

～初等部生、那須(馬事研究所)での集団疎開の話～

10月26日(月) グループ学習

- ① 戦争、争い、戦が、なぜ起きたか分析
- ② 太平洋戦争中の出来事を調べる
- ③ 平和についての取り組み調査 (国連・NGOなど)

11月 5日(木) 原爆先生池田眞徳氏の特別授業

III. 報告の内容

1、人は、なぜ争い、戦争をするのか

歴史上の戦や戦争から、その原因が何なのかつきとめることにした。

1つめは、水や食料、領地などの、モノをめぐる争い。日本での争いの始まりは、稲作が日本に伝わった「弥生時代」からだといわれている。稲作が伝わり、人々は水や米、土地などをめぐり争いを始めるようになった。その結果、小さな「ムラ」から大きな「クニ」という集団ができ、やがて富を求めてクニ同士が争いをするようになった。鎌倉時代には、「ご恩と奉公」と呼ばれる「將軍」と「御家人」の関係があった。これは、「御家人は將軍のために戦い、將軍は御家人に領地などのほうびを与える」という仕組みによって成り立っていた。領地をもらうために、御家人は命がけて將軍のために戦った。一生懸命という言葉は、ひとつの所に命をかける「一所懸命」という言葉から来ている。つまり、人は領地のためなら命までかけるのだ。

2つめは、「権力」をめぐる争い。飛鳥時代、「蘇我氏」という豪族は、天皇をしのぐほどの権力を持っていた。その権力を、天皇に取り戻すために、「中大兄皇子」と「中臣鎌足」が「蘇我入鹿」を暗殺し、「大化の改新」を行う。平安時代には「平氏」と「源氏」の間で、権力をめぐって、「一ノ谷」、「屋島」、「壇ノ浦」の戦いなどが起きた。室町時代の「応仁の乱」は將軍のあとつぎをめぐる争いだった。戦国時代には、天下統一を目指し、「織田信長」「豊臣秀吉」「徳川家康」などの戦国武将が戦いを繰り返した。豊臣秀吉は、日本だけでなく、朝鮮まで出兵をした。ここには、

日本だけではなく朝鮮にまで権力を拡大したいという思いがあった。

3つめは、「不満」や「反発」が原因となって起こる争い。江戸時代、農民が不当な年貢の取立てに対して起こした各地の「一揆(いっき)」、や、キリスト教の信仰を禁じられて起きた「島原の乱」は、権力によって押さえつけられたことに対する反発である。明智光秀が織田信長に対して起こした「本能寺の変」もまた、織田信長へ反発や不満がもとにあった。「江戸時代」が終わり、「明治時代」に入る際には、「開国」に反対する「幕府軍」が開国を進める新政府軍に反発し「戊辰(ぼしん)戦争」が起こる。また、武士が必要とされなくなったことに対して、「西郷隆盛」率いる薩摩の武士が不満をいだき、政府を相手に起こしたのが「西南戦争」だ。このように不満が高まると反発し、人は命をかけて戦うようになる。

こうしてみると、争いの原因は次の3つに分けられることがわかる。

1つめは、水や食料、米、領地、資源、お金などのモノ。2つめは、権力。3つめは、不満や反発。これをさらに大きくまとめると、モノと権力はどちらも相手から「奪う」という行為で、不満や反発は、相手から何かを奪われそうになったり、奪われたりすることで生じる。このように、3つの争いの原因の中心は、「奪う」という行為がある。そして、奪われてしまうことの「恐怖感」や、奪うことへの「正義感」が、争いを続けさせている。

次に、自分たちがどんな時にけんかをしてしまうかを考え、それが歴史上の戦や争いのどこに入るかを考えた。すると、次のようになった。

- ① 水、食料、領土などのモノをうばうに当たるもの
 - ・友達のものをとる
 - ・サッカーゴールの取り合い
 - ・おかわりの取り合い
- ② 権力の奪い合いにあたるもの
 - ・1番になりたがる
 - ・勝ち負けを競って争う
 - ・自分が優先されていないと怒る
- ③ 不満、反発に当たるもの
 - ・食事の準備を相手がしない
 - ・言ってもやめてくれない
 - ・悪口を言われる・からかわれる

「悪口」や「からかい」は、一体何を奪っているのだろうか。実は、人にとってとても大切な「尊厳」を奪っていると言える。

こうしてみると、歴史上の戦争や争いも、私たちの身近な争いも、どちらもつきつめれば、相手から何かを「奪う」「奪おうとする」ことで起きていることが分かる。

2 太平洋戦争中のできごと

太平洋戦争中に起きていた出来事について、終戦のとき10歳であったという元初等部教師の菊池先生や、20歳であった油田先生、お父様が原爆にあわれたという池田眞徳さんのお話を伺った。また、「昭和館」では、戦時中の庶民の人々の暮らしを学び、「しょうけいかん」では手足や目を失った傷痍軍人のことを調べた。



発表では「配給制」「供出」「言論統制」「傷痍(しょうい)軍人」「空襲」「学徒動員」「神風特別攻撃隊」「原子爆弾」について報告をしたが、書面ではそれは省略する。

自由学園の上空も、爆撃機が飛び、武蔵野市の中島飛行場や東京の街をめがけて飛んでいったことや、学園のグラウンドの隅など、学園内にもいくつも防空壕を作り、そこに入ったというお話を伺った。油田先生のお話では、東京大空襲の際、学園から見る東京の空は赤く、女子部体操館のガラスが真っ赤になって東京の空を映していたとのことだ。



3 戦争について、どう考えるか

戦争の悲惨さ、無意味さを学習し、戦争についてどう考えるかをクラスで調べた。

戦争	いけない	どちらとも いえない
なくしていくべき	A 30人	B 2人
しかたない	C 1人	D 0人

Aの「戦争はいけないし、なくしていくべき」と考えた人は30人を占めた。Aからは意外に思われたBやCの理由は次のようなものだった。

B: 太平洋戦争があったことで、今の日本は平和がある。過去の戦争は良かったはいえないが、あの戦争がなければ、日本はいまだに戦争をする国だったのではないかと思う。だから、「どちらとも言えない」を選んだが、今後はなくしていくべきだと思う。

C: 必要なモノが手に入らず、交渉をしてもだめであれば、そういう国があってもしかたがないのではないか。それに、自分の国が攻撃されそうになって起きたのならば、仕方がないのではないか。

Cの考え方は、自分の国を守るためであれば、戦争は仕方がないのではないかという考え方で、世界の国々もこのような考え方は当然としている。現在の日本の自衛隊も、万が一日本が他の国から攻撃を受けた際の自衛のために存在している。つまり、自衛は正当な行為とされているのだ。

4 太平洋戦争までの流れ

太平洋戦争がなぜ起きたのか。その流れを確認したい。鎖国から開国することで江戸時代は幕を閉じた。開国した日本は、「富国強兵」のスローガンのもとで、豊かで、

強い国を目指し、近代化を目指した。世界は「帝国主義」と呼ばれる時代で、領土をめぐる世界で戦争が繰り返される中、日本も日清戦争・日露戦争・第1次世界大戦で勝利し、経済的に、より豊かになっていった。世界では、1918年の第一次世界大戦の結果、二度と世界を巻き込む戦争をすることがないように、国際連盟ができます。1920年、日本も国際連盟に加入し、常任理事国となる。これで日本も世界の強国の仲間入りという意識が国民の中で一層高まった。

1931年、9月18日夜10時過ぎ、中国の柳条湖で南満州鉄道が爆破される事件があった。これは、日本軍の起こしたもののだが、「中国軍のしたこと」とし、中国軍を攻撃することになった。いわゆる「満州事変」だ。

1932年、日本は、満州全土を占領した後、満州国を作りあげた。1933年、スイスのジュネーブで国際連盟の総会が開かれ、日本軍の満州からの撤退を勧告する決議案が出され、41対1の議決で可決された。1は日本だ。日本は、この決議に従うことができず、国際連盟を脱退した。こうして、日本は、世界の国々からはなれ、軍国主義への道を走っていくことになった。

1937年、北京郊外の盧溝橋(ろこうきょう)の近くで演習をしていた日本の軍は、中国軍から発砲されたとして攻撃を開始し、たちまち盧溝橋を占領した。その後、日本軍は北京、天津を攻撃し、占領していく。こうして、日中戦争へと突入していく。

1940年、日本は、ドイツ・イタリアと三国同盟を結ぶ。これは、アメリカを敵にした軍事的な同盟だ。この同盟ができると、日本は、アジアを西欧の国々から独立させるという正義感から「大東亜共栄圏」の確立を目指し、戦いを繰り返した。このように戦争を正当化するための理由がそろい、国民も、メディアも、戦争に対して熱狂していくことになる。

このような状況に危機感を感じ、1941年、アメリカは日本への石油の輸出を禁止し、アメリカに住む日本人の土地や財産を押さえた。さらに、アメリカ(A)、イギリス(B)、中国(C)、オランダ(D)のABCD包囲網をつくり、日本に対する「経済制裁」を加える。これに対して、1941年、12月8日、日本はアメリカの真珠湾を攻撃をし、太平洋戦争へと突入していった。

日本のした戦争は、①領土の拡大 ②権力の拡大

③ 不満の解消 の全てがそろっていた。さらに西欧に対する恐怖心、アジアに対する正義感もあった。メディアや軍隊が戦争を正当化する空気を作り、「理由があるからしかたがない」と考え流されていく人々が大勢いた。Cの考え方は、「自分の国を守るためであれば良い」とするものだが、太平洋戦争もこのようにして始まった。戦争は「自分の国のため、理由があるからしかたがない」という考え方で始まるものなのだ。

5 平和を創るには

11月14日土曜日、朝日新聞に「最近誰とケンカをしましたか」というアンケートがあった。様々な年齢の約2000人の人が答えているもので、けんかの原因の94パーセントが「堪忍袋の緒が切れた」「侮辱された」「けんかを売られた」「裏切られた」という、自分には原因がないけど、相手がしてきたというものだった。それに対して、「気に入らないのでこらしめた」「勝てそうだった」「力を示す必要があった」というものが6パーセント。されたからするという理由が、自分からしたという理由の1.6倍もある。

このことから、人は、自分が原因でけんかが起きたとは思わないことが多いと分かる。つまり、ケンカをするときは、悪いのは相手だと考えてしまうものなのだ。これは、ケンカだけではなく、戦争にも同じことが言えるように思う。

戦争のことを学習する中で、自分で良いか悪いかをよく考えて、自分の意見をしっかり持って、流されないことを意識しないといけないと子どもたちは気がついた。「良いか悪いか」を考えると、6年生では「自分と同じようにみんなが動いたら、社会はどうなるか」ということを基準に考えてきた。

みんなが、どう考えたら戦争やけんかはなくなるのだろう。その可能性が一番高いのは、「いけない」と考え「なくしていくべき」と考えることだと結論付けた。だから、まずは自分自身がそう考え、そうできるように行動していかなければならない。

私たちの多くは、戦争はいけないし、なくしていくべきだと考えている。でも、されたからしかたがないとい

う人の考えもよく分かる。そういう考え方があるのなら、自分たちはどうしたらよいか。

争いの原因は「奪う」だ。だからまず、相手から何かを奪っていないか気をつけないといけない。また、争いの元になる「奪う」の反対の言葉は何か。それは「与える」だ。私たちは、人に「与える」ことによって、平和を創ってけるのではないだろうか。

戦争がなくても平和ではないことはいくらでもある。だから、私たちは、人から何か奪ってしまっていないか考えて過ごす必要がある。また、奪われないように守ろうとして、かえって争いを引き起こしてしまっていないか考えないといけない。

「平和を創る」とは、「自分が人から奪わない」こと、そして、人に何かを「与えていくこと」なのだと思う。世界中の人がみんなそう考えたらきっと本当に良い世界になる。だから、まずは私たちが、人に何かをあたえられる人になって、たくさんの平和を創っていきたい。



IV. 報告会を終えて

クリスマスを迎えるにあたって、初等部では「神様に喜んでいただけることをする」ということを意識させている。この学習をしてきた今年の6年生では、「神様に喜んでいただく」＝「人に何を与えられるか考えて行動する」＝「平和」という意識が芽生えた。そして、実際に行動にも現れてきた。今回の学びが、今後もどのような形で現れるか楽しみである。ぜひ今回学んだことを実現できる人になっていってほしい。

V. おわりに

戦後70年の日本は、歴史上最も平和な世の中になっ

ていると、ほぼ全ての子どもたちが思っていた。これから70年後の子どもたちが、「今の時代が歴史上一番幸せな世の中だ」 いえる日本や世界を築いてほしい。

VI. 参考文献 NHKスペシャル

「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」

「特攻～なぜ拡大したのか～」

「沖縄戦 全記録」

「カラーで見る太平洋戦争の記録」

「きのご雲の下で何が起きていたのか」